



TITLE:

司馬遷の商業観

AUTHOR(S):

桑田, 幸三

CITATION:

桑田, 幸三. 司馬遷の商業観. 経済論叢 1962, 90(2): 130-141

ISSUE DATE:

1962-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/132896>

RIGHT:

經濟論叢

第九十卷 第二號

自由主義經濟を守る道……………伊 藤 寛 1

ブルック・ファーム……………穂 積 文 雄 16

日本海運業における減価償却の

生成過程 (その三) ……………高 寺 貞 男 37

司馬遷の商業觀……………桑 田 幸 三 58

書 評

井上忠勝著

『アメリカ経営史』……………三 島 康 雄 70

昭和三十七年八月

京都大學經濟學會

司馬遷の商業観

は し が き

司馬遷が史記の編述に従事したのは、彼が父談の遺囑をうけ、また太史令となった、前漢武帝元封三年（B・C一〇八年）から、昭帝始元三年（B・C八四年）にいたる二十五年間であったとされる⁽¹⁾。

選白ら言うように⁽²⁾、彼は陝西の龍門に生まれ、耕作牧畜に従事し、十歳で古文の経書を暗誦し、二十歳で南は長江・淮水に遊び、会稽山に登り、沅水・湘水に舟を浮かべ、北は汝水・泗水をわたり、齊・魯の都に字業を習い、孔子の遺風を觀、郷射の礼を行い、彭城・梁・楚を経て歸った。仕官して郎中となり、命を奉じて巴・蜀に遠征し、邛・笮・昆明の地を攻略した。そのうち父の死に遭い、孔子春秋の意圖にのっとり修史の遺託をうけた。天漢二年（B・C九九年）にいたり、李陵の禍をうけ、腐刑に処された。やるせない憤懣は彼を驅つていよいよ史記編

述に専念・邁進せしめることとなったようである。

史記編述の基本的態度として司馬遷は、「述べて作らず」といつている。だが、上に述べ來つた経緯、彼が史記編述に着手・専念するようになった動機なり、発憤の次第なりから容易に推察し得るように、冷厳な史官的態度の中にも、漢の、とくに武帝の治世を「乱世」とみる批判的精神が散見せられる。たとえば、孝武本紀はもっぱら神仙の術や鬼神の祀りの記述に終始しているのに対し、平準書は文・景時代の經濟的繁榮を諷刺したあとで、武帝時代の軍国主義的積極政策による經濟統制を詳述し⁽⁴⁾、人民大衆や經濟界の蒙つた被害や怨嗟の感情を描写してい

る。それかあらぬか、武帝五十五年の治世を通じ極端な抑圧・統制を蒙り衰滅に類した「商業」なり「商業人」について、司馬遷の史眼はかなり同情的である。貨殖列伝を独立させて、儒林列伝などと併立對置させた彼の意圖も察するに難くない。

商業に関する司馬遷の意見を整理すると、つぎの二項にまとめることができる。

一 商業はどのような機能を果すべきものであり、社会的にどのような地位を占めるものであるか。商業の社会・経済的機能。

二 商業の経営に当る人間はどのような識見・能力を具えているか、また具えているべきか。商業経営者の人間像。

三 商業に対する国家の政策はいかにあるべきか。商業と政治との関連。

以下、順を追うて彼の商業観をうかがうことにしよう。(5)

(1) 山下寅次、史記編述年代考、山下先生還暦記念東洋史論文集一八一頁。鄭鶴声編、司馬遷年譜は、征和二年、史記始めて成る征和三年、史記の筆を絶つとしている。

(2) 史記列伝、太史公自序第七十より要訳。史記の原文は商務印書館百衲本二十四史、邦訳は筑摩書房、世界文学大系史記（小竹文夫・小竹武夫訳）または岩波文庫、加藤繁訳註史記平準書・漢書食貨志による（以下おなじ）

(3) 同右十二頁、余所謂述故事整齐其世伝、非所謂作也。至今上即位数歲漢興七十余年之間國家無事非遇水旱之災

(4) 民則人給家足都鄙廩庾皆滿而府庫余貨財京師之錢累巨万貫朽而不可校大倉之粟陳陳相因充溢竊積於外至腐敗不可食：楊可告繒偏天下……得民財物以億計奴婢以千万数田大畧

数百頃小畧百余頃宅亦如之於是商賈中家以上大率被民儉甘食好衣不事畜藏之產業……是時山東被河災及歲不登數年人或相食方一二千里（平二、三、十四、十六頁）

(5) 武帝時代の財政については拙稿「散不足」と「聚不足」（經濟論叢第八六巻第五号）参照。

一 商業の社会・経済的機能について

司馬遷は史記貨殖列伝のはじめに、老子の『小国寡民論』を掲げ、これを現実の経済政策として実施するには、人民の経済的欲望を制限抑圧することが必要であり、到底実現し得ない空論にすぎない、と論じている。(1) 司馬遷は人間の本能的欲望を肯定する。平凡な人間の集団である現実社会の経済を論ずる場合に、平凡な人間に共通する平凡な欲望を平直に認めることは、経済理論の前提として経済人を想定するのと同じである。儒家や道家のように倫理的あるいは理想的な人間を前提して「寡欲」や「節欲」を説くような論法は、彼の採らない所である。ここに彼の思考のきわめて現実的な側面がみられる。すこし彼の言葉を掲げてみよう。

神農以前のことはわたしも知らないが、『詩』『書』に述べてある虞・夏の時代以降ともなれば、耳目は美声美色好み、をきわめようとし、口は牛羊の美味をきわめようとし、身

は逸楽に安んじ、心は権勢才能の榮華を誇るようになり、その習慣がしだいに人民の心にしみこんでからもう久しいことである。したがって老子の言うような妙論では、たとい軒並みに説いてまわったとしても、民を感化するなど、とうてい望めることではない。……さて、山西には材木・竹・穀・繻・旄・玉などが多く、山東は魚・塩・漆・絲及び美女を産すること多く、……以上が物産の概略であるが、みな中国人民の愛好するものであり、世俗の被服し飲食し、生者を養ひ死者を送る具である。そこで農をよって食ひ、虞をよって材を出し、工をよって加工し、商をよって有無を通ずる。⁽⁸⁾

財の種類が少なく、人間の物質的欲望も限定されていた時代、経済発展初期の自然経済的な社会においてこそ、少国家民論が、したがって商業不要論が成り立つであろう。だが、ひとたび消費生活の水準が高まり、人民がより豊かな生活に馴れた後に、人為的に欲望を制限抑圧することは至難である、と彼はみるのである。そして農業・林業・工業などの製品を消費者の欲望に適合提供することによって、人民をも国家をも富裕ならしめる所に、商業の社会的、経済的機能を認めたのである。こうして、社会的分業のもとで各産業部門の間に自然的調和が実現する状態こそ、「ものの道理に合った、自然のあらわれ」⁽⁶⁾であり、その中に商業の果すべき機能、社会的地位が見出される、とする。司馬遷の考え方は、きわめて自由主義的であり、後にみるよ

うに、経済の運行は自然に任せるのが上策であり、国家権力による統制は望ましくない、とする。自由に放任すれば、商人は当然、利益の追求、營利原則に立つて行動する。消費生活における人間の本能的欲望を肯定し、その充足をもって経済生活の目標とみる司馬遷は、その目標達成の手段として、社会的分業と營利原則にもとづく経済の自由主義的運行とを是認する。そしてその中に商業の果すべき役割を決定し、また商業の社会的な位置づけをしているのである。

商業は社会の進化、経済の発展につれてその地位を確立したが、商業に対する自然的風土の影響もまた見逃し得ないものがある。司馬遷はこの点にも着眼していたようである。史記の夏本紀に禹の事蹟として「九州を開き、九道を通じ、九沢を陂し、九山を度つた」として、尚書禹貢編の記事をかかげている。当時の全土を九州に分ち、それぞれの地質、肥沃度、賦の等級、真鹽の種類、交通などを明らかにしているのである。これは広大な中国の国土を経済地理的に分析したものであって、九州それぞれの特長性を析出し、とくに九州と都冀州との交通に着目していたことがうかがえる。

司馬遷はさらに貨殖列伝の中で彼自らの旅行中の実地の見聞をもとにして、全国各地の経済地理的分析を試みている。各地の風土、人口、習俗、産業から歴史的沿革にいたるまで、綿密・適確に描写している。今日いうところのマーケティング

の重要課題である「市場調査」「市場分析」に相当する事柄が多くみられ興味深いものがある。

さて、禹貢の記事や、司馬遷流の人文地理的考察などを通じて「商業」について言いうことは、中国においては自然地理的および人文地理的な諸条件が商品流通の必要度をいじめるしく増大させる要因であった、ということである。「地大物博」と形容せられる中国の風土の特殊性は、政治的統一過程の進行と相まって、「商業」の成立、発展を促す原動力であつたろう。国民の経済生活における「商業」の社会・経済的機能もまた、この中国の風土においては、とくに重かつたであるということ、を、司馬遷は見ぬいていたにちがいない。

- (1) 老子曰至治之極鄰國相望雞狗之聲相聞民各甘其食美其服安其俗樂其業至老死不相往來必用此為務輒近世盜民耳日則幾無行矣（貨一頁）

- (2) 例えば、士志於道而恥惡衣惡食者未足与議也（論語里仁）子曰飯疏食飲水曲肱而枕之樂亦在其中矣（同述而）何必曰利亦有仁義而已矣（孟子梁惠王上）無欲以觀其妙（道德經一章）見素抱朴少私寡欲（同十九章）知足者富（同三十三章）

- (3) 史記、貨殖列伝（一、二頁）小竹詠（二）四二三頁
(4) 同右、周書曰農不出則乏其食工不出則乏其事商不出則三寶絕賔不出則財賤少財賤少而山沢不辟矣此四者民所衣食之

- 原也原大則饒原小則鮮上則富國下則富家（二頁）
(5) 同右、豈非道之所符而自然之驗邪（二頁）
(6) 司馬遷の経済地理的觀察、分析の一斑を表示するとつぎのようである。（貨七、八頁）

地方又は 都會	記 事	
	關中	關東
	晉壤沃野千里自虞夏之貢以為上田其民好稼穡殖五穀地於天下三分之一而人衆不過什三然量其富什居其六 隙隴蜀之貨物而多賈 北卻戎翟東通三晉亦多大賈 四方輻湊鉅至而會地小人衆故其民益玩巧而事末也	巴蜀 亦沃野地饒居葷丹沙石銅鐵竹木之器南御滇粵東僑西近邛笮笮馬旄牛然四塞棧道千里無所不通唯巖斜結轂其口以所多易所鮮（略） 昔唐人都河東殷人都河內周人郛河南夫三河在天下之中若鼎足王者所更居也建國各數百千歲土地狹小民人衆都國諸侯所聚會故其俗纖儉習事（略）

- (7) 土地が広大で産物が豊富。中国人の自国礼讃の常套語（韓愈、平淮西碑）

二 商業の経営者（企業家）について

周礼に「商賈は貨賄を阜通す」とあり、詩経に「布を抱いて絲を賣う」とみえ、易には「日中市をなし天下の民を致し、天下の貨を聚め、交易して退き、各その所を得」とある。いづれも中国における始原的な商業の状態を伝えている。だが史記の時代ともなれば、商業は相当進歩し、商業事象はかなり拡大・高度化していたようである。商業を経営する専門家の姿をわれわれは貨殖列伝の素封家たちの中にみることができ、蓄積された資本と、大量の奴隸ないし雇用労働を結合駆使し、交通・倉庫など諸機關を操り、天下に周流して物通せざるはなく、その欲する所を得さしめた商業経営者たちの活躍は、めざましいものがある。司馬遷が、このような商業経済界の將帥たちから抜き出した人間像はいかにあるか、また、どのような人間像を期待したか。専ら貨殖列伝について見て行こう。

司馬遷はまず計然を登場させ、その貨殖哲学を語らせている。計然は言う。

戦争のあることがわかれば、防備を固めなくてはならず、時の必要があれば、用いる物がわかるはずで、この二つが明らかなら、万貨の情態が觀察できるのです。されば歳星が金にあれば豊作、水にあれば不作、木にあれば饑饉、火にあれば旱魃（ひんがつ）となるので、旱魃の時にこそあらかじめ舟を買い集め、

洪水の時にこそあらかじめ車を買い集めるのが、物の道理であります。六月日には豊作、さらに六月日には旱魃、十二年ごとに一度の大饑饉がありますが、穀物を売り出すのに、一斗二十銭では農民をなやまし、一斗九十銭では商人をなやまします。商人がなやめば財貨は流通せず、農民がなやめば田畑は荒廃するので、穀価はたかくても八十銭を超えず、やすくても三十銭を割らないようにすれば、農商ともに便利です。売価を公平にして物価を適正にし、関市を経て流通する物資を乏しくないようにするのが、国を治める常道です。蓄積の道は、なるべく完全な品物を手に入れたとともに、永く手元に置くものではありません。はやく物資を交易し、腐敗したりいたみやすい物を貯めておいてはいけません。また高価なものを買えておくのもいけません。物資の過不足を考えれば、物価の高低はわかるもので、騰貴の頂点に達すれば、やがてかならず下落し、下落の極点に達すれば、やがてかならず騰貴するものです。だから高いときには、掘土を捨てるように惜しみなく売り出し、やすいときには、珠玉を求めるように惜しんで買い入れ、物貨と金銭を流れる水のように流通させるのがよいのです。

と。こうして越は会稽の恥を雪いだのである。計然に即事した范蠡は、致仕の後、陶の地が全国的流通上に占める立地的優位を見極め、そこに移り住み貨殖に努めた。彼は言う。

商品を蓄積し、もつぱら時機を見はからって売買し、人を相手にしなかった。……巧みに生業を営む者は、よく取引の相手を選び、あとはただ時機を逐うだけなのである。

と。子貢は学を孔子に受けた後、術において財貨の屯積販売を行い、孔門七十子のうち最も富み、孔子のよきベロンともなつた。白圭は「時変を觀るを樂んだ」という。景氣の変動や、物價の季節的変動や、農作の豊凶などを、他人に先んじて予測することができたのである。かくてその蓄積は年々倍増したが、平常は勤儉節約に努め、時機に投ずること猛獸猛禽の獲物にとびつくようであつた。白圭は言う。

わしが財産を貯えるのは、ちょうど伊尹・呂尚のはかりごとや、孫武・呉起の兵法を用い、商賈の富国強兵策を実行するようなものである。だから臨機応変に働く知恵がなく、事を決断する勇氣がなく、物を取予する仁徳がなく、守るべきことを守る力のないような者は、いかにわしの術を学ぼうと望んでもわしは教えないのである。

刁間とやうかんは奴虜を愛賞した。人の嫌う惡がしい奴隷さえも引き取つて、魚塩商賈の業に従がわせた。多数の人々を適材適所のに使役し、各人の能力を十分發揮させ、彼等自身も富裕になるように計らつたのである。

任氏は秦の滅亡にあたり倉庫の穀物を害にした。洪・楚相戰い米穀が騰貴すると、先に他の豪傑たちが得た金・玉は尽く任

氏に帰した。

呉楚七国の乱に、長安の列侯封君が軍資の借用を頼んだが、金貸たちは躊躇した。ひとり無塩氏は千金を出し、三月にして乱平ぎ、その息を十倍にした。

さて、以上の諸事例が示唆する所を總合するに、商業経営者はただ単に商品を右から左へ転々流通して利益をむさばると言うような、なまやさしい仕事に終始するものではさらさらない。商業経営者として商業の機能を十分に發揮し、かつは利潤を獲得・蓄積するためには、諸物資の需要・供給の予測、需要・供給と価格との相関々係、価格および景氣變動の予測、はては天文、人文地理的知識など、専門的識見がなければならぬ。

さらに計断性、決断力、臨機応変の応用力などが必要とせられるし、大所・高所から物事を觀察し判断する能力が具備していなければならず、人間關係を適切に處理する能力や仁徳も必要である。なおまた、商業経営者の徳性ないし生活態度として強調せられるのは「節儉・勤勞」である。かの白圭は、飲食を薄くし嗜欲をがまんし、衣服を節し、働き手の奴僕と苦菜を共にした。任氏は家憲として

わが家の田畑・牧場から出るものでなくては消費しないこと。公務の終わつた後でなくては、飲酒肉食しないこと。

と約束し、これが郷里の模範となつた。魯の曹邴氏は富巨万を積みながらその父兄子孫一族そろつて

うつむくときは物を拾え。あおむくときは物を取れ

と約束しあい、行商に出かけること、あまねく諸郡諸國にわたった。周の師史も節儉勤勞にはげみ、ために洛陽の貧乏人も富家にならって商売を覚え、永らく行商していることを誇り、郷里の邑まちを通つてもわが家の門をくぐらなかつた。実に節儉と勤勞は生計を維持するうえの正道であつた。

最後に、商業經營者としての矜持について述べなければなるまい。右にみてきたような、もろもろの能力や徳性をもつた商業經營者たちが、みづからの立場を自覺し、商人たることを誇りとするにいたることは、むしろ理の当然と言えよう。元來、商業を輕視し、商人を蔑視する思潮は、先秦時代以前においては社会的傾向であつた。それは、欲望を絶つことを唱え、したがって生産を輕視し、分業を否認し、したがって商業をも否認する道家的思想か、農業經濟時代の重農的思想――農業を本業とし、商工業を末業とみる儒教的倫理や、重農政策的立場から商業を抑圧せんとする法家的思想やに由来するものであつた。このような商業輕視の思潮は、漢代にもかなり強く受けつがれてきた。高祖や恵帝の時代に、商人が身分的に一段低く格付けされていたことは、平準書などにみられるとおりである。

しかしながら、經濟の發展につれて商業の機能が增大し、商業事象が拡大・高度化してくると、商人の社会的地位も実質的に向上し、いつまでも古い、狭い枠にはめこんでおく事ができな

くなつてきた。司馬遷は卒直にこのような事実を事実として承認した。いまや商人は商人たることを自負し、商業經濟界の將帥たることを誇りとするに至つた。秦の始皇帝さえ、富商烏氏の保を諸侯なみに待遇し、春秋ごとに大臣とともに参朝させた。兩陽の孔氏は車騎を連ねて諸侯のもとに遊び商賈の利をあげたが、貴公子然たる所あり、彼の贈物に対し「游閑公子之賜」という名があつた。曹の邵氏の影響で、鄒・魯の地方では、文學愛好の風尚をすてて商利に走るものが多かつた。かの刁間は車騎を連ねて郡の太守、諸侯の大臣と交際した。そこで

爵禄を取るか、刁氏に付こか
とまで喧伝された。洛陽で、永らく行商していることを誇りとする風習を生じたことは、さきにみたとおりである。呉楚七國の乱に無塩氏から軍資金の調達をうけた長安市中の大小諸侯の逸話は、わが國徳川末期における諸藩と豪商との關係を連想させるものがある。司馬遷が言うように

素封家たちは、いずれも爵邑俸禄があつたり、法律を悪用し姦計をめぐらしたりした結果として富んだものではない。すべてのごとの道理をおしはかつて進退行動し、時勢に順応して利益を得、商の末利をもつて産をなし、農の本利をもつてこれを守つたのである。また

富を得るにはどんな職業でもよく、財貨も常に特定の持ち主があるわけではない。才能ある者には財貨が集まり、不肖

の者には蓄積した財貨さえたちまち消散してしまふ。千金の家は一都邑の君主に匹敵し、巨万の富豪は王者と享樂を同じくする⁽⁴⁾。

ことができた。素封家たちの營利は、堂々^{（5）}と行われた。營利行為そのものは、なんら非難・排斥される理由をもたない。貧賤を嫌ひ富貴を求めるのは人情の自然ではないか。

かの千乗の王、万戸の侯、百室の卿大夫でさえ、なお貧乏をうれえるのである。まして匹夫編戸の庶民においてはなおさらのことであろう。

まことに

天下は熙々と和樂して、みな利のために来り、

天下は攘々^{（6）}と入り乱れて、みな利のために往く。

のである。營利が人間の經濟行為に刺激を与え、それがもたらなうて經濟社会全体の調和的進行が自然に實現される。商業のみが營利行為ではない。清廉を称される官吏も、軍陣に命がけの功名を立てる壯士も、ならずものの青少年も、遊里の女たちも、遊閑の貴公子たちも、医卜星相の人たちも、すべて皆、その行動の目標は富を求め貨を益すにある。商業だけが營利目的のゆえに非難排斥せられ、また商業人が輕蔑せられ、自らも卑下する必要は全くない。司馬遷はさらに言う。

もし家が貧しく、親が年老い妻子も、虚弱で、時節時節の祖先の祭祀もできず、親戚知人らの贖金によって飲食被服し、

司馬遷の商業観

世間並みにつきあうこともできないようなものなど、このようなきまでいて、なお恥としないなら、もはや人並みに扱ふすべはない。されば財産のないものは勞働し、やや財産のあるものは、知能をはたらかして殖せうとし、すでに財産のゆたかなものは、時機をねらうて利を争おうとする。これがその大筋である。……⁽⁷⁾ 穴資の奇士のようなおこないもなく、いつも貧賤でしかも好んで仁義を語るのは、また恥すべきことである。おしなべて下々の庶民というものは、相手の富が自分の十倍であれば卑下し、百倍であれば畏れはばかり、千倍であれば喜んで使われ、万倍であればその奴僕にもなり下がるのが自然の勢いである。ことわざ「貧をもつて富を求めるには、農は工に如かず、工は商に如かず、繡文を刺すは市門に倚るに如かず。」とあるが、これは末業といわれながら、商工が貧乏人にとって金持になる道であることを物語っている。と。彼によれば貧賤こそ恥すべき状態である。なぜなれば、貧賤は、労働や知能や識見の欠如・不足をみづから表明するようなものであるから。司馬遷はまた、寧成をしてつぎのように語らせている。

仕官して二千石の身分になれず、商売して千万金を蓄えられなくては、どうして人並みと言えよう。⁽⁸⁾

と。宮仕えしない身で安樂な生活ができる「素封家」たちの矜持は、まさに推して知るべきであろう。

(1) 計然けいぜんは范蠡はんりと共に越王勾践こうせんの重臣であつた。范蠡はんりはのちに一商業人として私的個別経済の上に貨殖かしょくの策を試みたが、計然けいぜんはこれを一国の経済政策として実施した。

(2) 魏轅えいぜん文雄、先秦経済思想史論参照

(3) 天下已平高祖乃令賈人不得衣絲乘車重租稅以困辱之幸惠高后時為天下初定復弛商賈之律然市井之予孫亦不得仕官為吏(平一頁)

(4) 貨殖列伝によつて両者の所得を比較するとつぎのとおりである。(十四頁)

所得の種類	所得の源泉	所得の割合	年間所得
諸侯封爵俸禄	領民	戸数割二〇〇銭二〇万銭	
素封家事業收益	資産	收益率 二割二〇万銭	
	一〇〇万銭		

(5) 史記酷吏列伝第六十二(四頁)

三 商業と政治との関連について

先にみたように、山下説によると、司馬遷が生れたのは武帝建元六年(B・C一三五年)であり、武帝の治世を生きぬいて昭帝の始元三年(B・C八四年)にいたつて死去した。したがって、武帝の抑商政策は、まさに司馬遷の眼前において展開せられたことになる。商業の社会・経済的機能について、また商業経営者の人間像について、いままでみてきたように明確な認識

と理解とを具えていた司馬遷は、この「商業受難」の歴史的事実をどのように観察把握し、商業政策のあり方についてどのような意見をもっていたのであろうか。

まづ平準書によつて、武帝のいわゆる抑商政策そのものを一瞥しておくことにしよう。武帝即位の初め頃までは、太平無事の余沢をうけて、政府も人民もおしなべて殷富な状態にあった。司馬遷はつぎのように述べている。

今上即位の数歳に至るまで、漢興りて七十余年の間、国家事無く、水旱の災に遇うに非ざれば、民は則ち人給し家足る。都鄙の崑夷皆な満ちて而して府庫貨財を余す。……故に人々自愛して法を犯すことを重り、行義を先にして、而して後恥辱はにかみを細く。此の時に当りて、網罟みづくにして民富み、役財して驕溢けういつす。或は兼并豪党の徒、以つて郷曲に武断するに至る。

と。ところが、ひとたび武帝の積極外交策が実施せられ、南方の東甌・西越、西南夷、朝鮮などと事を構え、ことに匈奴との和親関係を絶つて戦争状態に入り、しかもそれが長期戦の様相を呈してくると、俄然財政難に陥つた。そこで政府は(武帝は)百方手をつくして財政資金の調達に腐心することとなる。ところが、

富商大賈或は財を購かひひて貧を役し、転穀百数、麀居もぐして豎に居く。封君、皆な首を低れて給を仰ぐ。治鈔煮塩、財或は万金を累ねて、而して国家の急を佐けず

という状況であった。この、富豪連中の利己的、非協力的な態度が武帝の逆鱗にふれ、武帝がいよいよ商業禁止に乗り出すこととなる。塩鉄専売、商人の輜車・繒錦に対する重課、告緡の法、貨幣私鑄の禁止、均輸・平準の法など、一連の商業政策によって、「商賈中家以上大率破る」という状態となった。こうして、従来素封家たちが粒々辛苦して蓄積し、所有していた財産の多くが国庫に没収せられ、そのうえ、商業の機能もまた、政府みづからこれを担当し、商業利潤を国庫に奪い取ることとなった。かの刁閑や節吏など名だたる素封家たちも没落の憂き目にあったことは言うまでもない。

自己の眼前に展開せられた、なまなましい「商業壊滅」の歴史的事実を、司馬遷はどう受けとったであろうか。

司馬遷は貨殖列伝の中で、つぎのように語っている。

最善の政治家は民の好みのままに従い、次善の政治家は利益をもって民を導き、これにつぐ政治家は人民を教誨し、さらにこれにつぐ政治家は人民を統制し、もっとも拙ない政治家は人民と争うのである。

と。また言う。

農をまてて食ひ、^{（五）}虞をまてて材を出し、工をまてて加工し、商をまてて有無を通ずる。これは何と政教や徴発や期会^{（四）}を定めて集会することなどのお役所仕事があって、はじめておこなわれるものだらうか。人民がおのおのその能力のままに、その力をつ

くして、欲するものを得ようとするだけのことである。したがって物の値が低いときにはやがて高くなり、高いときにはやがて低くなるのであって、おのおのその業にはげみ、その仕事を樂しむこと、水の低きにつくように日夜休むことがなく、物は招かずしておのづから集まり、求めずして民はおのづから出すのである。これはなんと、ものの道理に合った自然のあらわれではなからうか。

と。二つの文章のうち、始めの方では経済統制を否定する意向を明らかにし、あとの文では統制なき自由経済社会における自然的調和を賛美している。司馬遷のするどい批判精神については、本稿のはしがきでふれておいた。それにしても、漢朝歴代の中でも最も専制的な武帝の政治方針、とくにその経済統制を具つ向うから批判し、政治として最下等のものだという。司馬遷は一史家の身として実に果敢な言論を史書の上に残したものである。しかし何といっても、その武帝の在世中に大部分の編述を終えた史記のことである。彼が述べようとして述べ得なかった事柄も少なくないであろうし、とにかく史記そのものを後世に遺さんがためにやむをえず割愛削除した部分もあったことと思われる。だが、いわゆる「述べて作らず」の態度で、彼一流の客観的な視角から「事実」の記録として史記におさめている文章について、われわれが前後の文脈から推して彼の真意を察することが困難でない場合もある。行間に秘められた彼の意

図を汲みとることが、ただ史記の一言一句を字義通りに解釈することに終始するよりも、むしろ司馬遷自身の期待に副うゆえんではなからうか。たとえば、太史公自序に

貨幣の流通は農商の交易を通ずる方便である。しかしその果ては、巧智をもてあそんで土地財産の兼併がますます殖え、投機の利を争い、本業の農をすてて末利の商に走ることとなる。よって平準書（第八）を作り事物の変遷を觀察した。

と彼はさりげなく語っている。だが、ここにもあからさまな政治批判を回避する配慮があったように考えられる。平準書の焦点は、むしろ武帝の軍国主義的な統制経済政策の変遷を觀察究明し、冷やかな批判を行うところにあつたと見ても誤りではなからう。その一つの例証として御史大夫卜式の言を平準書の中に見出すことができる。すなわち

式既に位に在り。郡国、多くは、^{めたいたか} 梟官の塩鉄を作ることを便とせず、鉄器苦蕪にして買貴く、或は^し 鹽いて民をして之を売買せしめ、而して船に算ありて商者少く、物貴きを見て、乃ち孔僅に因りて、船算の事を言う。

また、

卜式言って曰く、「梟官、^{まき} 当に租に食い、税に衣るべきのみ。今弘羊、吏をして市列肆に坐して、物を販^{ばい}ぎて利を求めしむ。弘羊を^いば、天、乃ち雨ふらん」と。

思うに、この卜式の言葉は事実このままだに卜式の口から出たか

も知れない。しかし、その言葉を史記に載せ、しかも平準書の結びの場所に布置したのは司馬遷である。これらの言葉は、少なくとも司馬遷の意中を後世に伝えるべき使命を担わされて、ここに載せられたのである、とみることができよう。

司馬遷が経済統制を否定し、商業国営に賛成しないのは、自由主義的な思想的立場からだけではないようである。さきの卜式の言葉にみられるような、経済統制や商業国営から現実派に派生してきた、経済的あるいは社会的な弊害、塩鉄專売や均輸・平準などの政策によって商業経済界が衰滅に瀕しただけでなく、国民生活もまた大混乱におちいった、という事実も重要な根拠であつたと思われる。また、今も昔も変らぬことながら官僚社会の腐敗——経済に関する場合にはとくに深刻となる——もその一つの根拠と考えられる。酷吏列伝にみられる武帝と張湯との対話⁽²⁾などは、この間の消息を伝えている。司馬遷はまた、平準書の中でしばしば経済官僚の腐敗を指摘している。官界と経済界とは本来別個の社会であるべきで、経済界の人間は政治にタッチすべきでない、と司馬遷は考えていたようである。この点もまた、経済統制、商業国営に反対する一つの根拠とみられる。

政府が経済統制、商業国営などに乗り出すのが不当であると言ふのなら、政府は国民の経済活動、とくに商事活動について没交渉、無関心であるべきか、と言えば、司馬遷の答はあながちそうでもないようである。度量衡制度の統一⁽⁴⁾、貨幣制度の制

(5) 定と貨幣価値の安定、交通路や交通機関の整備などは、民間の商事活動の発達を助成、促進するために、当然政府がとり上げるべき商業経済政策であるとする。アダム・スミス等における「安価な政府」の概念のように、行政の限界はこのへんまで、と彼は考えていたのであろう。

(1) 漢書 貨殖列伝六十一（九頁）

(2) 上問湯曰吾所為賈人願先知之益居其物是類有以吾謀告之者湯不謝湯又詳薦曰固宜有（酷十一頁）

(3) 例えば、興利之臣自此始也。吏道難而多端則官職耗靡。

除故塩鉄家者為吏吏道益難不選而多賈人矣。是官当食租衣稅而已今弘羊令吏坐市列肆販物求利亭弘羊天乃雨 など。

(4) 秦始皇本紀第六 一法度衡石丈尺遠邇同度。封禪書第六

尚書曰舜……同律度量衡

(5) 平準書第八 循吏列伝第五一九（楚）莊三以為幣輕夏以小為大百姓不便皆去其業市令言之相（孫叔敖）曰市乱民莫安其処次行不定……（一頁）

(6) 孝文本紀第十 孝文皇帝臨天下通關梁不異遠方。孝景本紀第十一 復置津關用伝出入。貨殖列伝 漢興海内為一開關梁弛山沢之禁是以富商大賈周流天下交易之物莫不通得其所欲

むすび

商業の社会・経済的機能についての認識自覚に立って商業人は営利活動を行う。その機能を担当実践するために、商業経営者としてのもの能力や徳性が必要とせられる。換言すれば、商業経営者たるに値する能力・徳性を欠く者では、商業の社会・経済的機能を果すことができないはずである。

商業の本質についての理解が十分でなく、商業の営利性というような現象面にのみ着目して、経済に対する統制を推し進め商業の国営を強行したところに、武帝の商業経済政策の根本的誤謬があった。商業経営者たる資質を欠き、商業の本質についての理解もない官僚たちに商業経済行政を委ねたがために、弊害は一層深刻になった。商業の営利性に目を奪われて商業利潤を国家のものとしたから、財政収入の上でのプラスは確かにみるべきものがあつた。だがその反面、商業の社会・経済的機能は停止し、国民の経済生活もまた流通面から麻痺状態に陥り、財政上のプラスよりもさらに大きなマイナスをもたらしした。

史記百三十篇を通じて司馬遷の商業に関する意見を抽出し、私なりにまとめると以上のようなことになる。太史公自序の彼の言葉をかかげて小稿をむすぶことにしよう。

無位無冠の布衣匹夫が、政治を害せず、百姓を妨げず、時宜に従つて売買し、財富をふやすのは、貨殖の道である。智者も見ならつてそうした道をとることがある。よつて貨殖列伝（第六十九）を作る。

——三七・三・三〇——